

## デフリンピック競技映像を視聴したアダプテッド・スポーツに関心のある体育専攻学生が指摘する競技の特徴

齊藤まゆみ

### The characteristics of the Deaflympics competition through the perspectives of the students majoring in physical education

SAITO Mayumi

#### Abstract

The purpose of this study is to clarify the characteristics of the Deaflympics competition through the perspectives of the students majoring in physical education who watched the competition video.

The participants of this study were 72 students majoring in physical education. They watched the video of the 2009 Taipei Deaflympics games and recorded their observations on a comment sheet. The keywords on the comment sheet were analyzed.

The result showed that most participants of this study did not consider Deaflympic sports as adapted sports. This viewpoint was unlike the one for Paralympics. In the context of the performance, it became clear that they were feeling low. It was pointed out that a characteristic of the quietness and various visual information in conjunction with it. The students majoring in physical education seemed to be interested in the competition, and they also had a question regarding the original cheering method at Deaflympics and the original approach of watching the games of the competition.

**Key words:** Deaflympics, sports, students majoring in physical education

#### 1. はじめに

聴覚障害者のスポーツ活動は、19世紀末頃からヨーロッパを中心に始まり、国内でも第二次世界大戦前から陸上競技や野球等の競技が行われていた。デフリンピック (Deaflympics) は、1924年にフランスで設立された国際ろう者スポーツ委員会 (仏語略 CISS; Comité International des Sports des Sourds、英語略 ICSD; International Committee of Sports for the Deaf) によって開催された国際競技会が起源である。その後、2001年に国際オリンピック委員会の承認を得て現在のデフリンピックという名称となり今日に至っている<sup>6)</sup>。このようにデフリンピックは、障害

者における国際的なスポーツ競技会として最も歴史があり、競技者も運営も聴覚障害者であること、公用語として国際手話を用いること、視覚情報を生かした競技運営が行われることにその特徴がある。

聴覚障害者は、デフリンピックだけでなく、オリンピックにも参加してきた。1948年以降の記録では、欧米と南アフリカの5名の競技者によって計11個 (金3、銀6、銅2) のメダルを獲得したことが確認されている<sup>11,12)</sup>。このように聴覚障害者のスポーツ活動の歴史は古く、障害者のスポーツだけでなく一般の競技会にも参加するなど、幅広い活動と卓越した競技レベ

ルを持つ競技者の存在が確認できる。

しかし、国内のデフリンピック認知度は、内閣府の調査<sup>8)</sup>によるとパラリンピックの94.0%に対して2.8%と極めて低い現状がある。また、聴覚障害者はパラリンピックの参加資格を有していない。それは、CISSが1989年に発足した国際パラリンピック委員会（IPC: International Paralympic Committee）を1995年に離脱したためである。その背景の一つとして、及川（1998）は、CISSの主張する、障害者の団体をコントロールするのは障害者自身であるべきだという考えかた（Selfrepresentation）が、現段階ではまだIPCに理解されていない<sup>13)</sup>ことを指摘した。また、デフリンピックがろう者の文化・コミュニティとしての価値観を有するものである<sup>14,16)</sup>ことも関連していると考えられる。このように、デフリンピックは一貫して聴覚障害者の大会として発展してきた。だが、2011年ハイタラスで開催されるはずであった冬季大会が直前に開催中止となり、続く2013年アテネ夏季大会、2015年バンクーバー冬季大会もその開催が危ぶまれている<sup>7)</sup>。そのため、これまで独自路線を展開してきたデフリンピック戦略の、今後の展開が注目される場所である。

さて、デフリンピックの認知度の低さを、国内の聴覚障害者はどのように感じているのだろうか。中村（2009）は、デフリンピック選手候補者を対象にアンケート調査を行い、当該選手たちは認知度を高めることを望んでいること、さらに、競技力向上のために、健聴者または手話のできる健聴のコーチに指導を受けたいと半数以上が回答していることを示した<sup>10)</sup>。五町（2010）は聴覚障害者の行うスポーツ活動をデフスポーツと捉え、生涯スポーツにおけるデフスポーツの役割について検討した。その結果、デフスポーツ実施者のデフリンピック認知度は98%と高く、重要な位置づけであることが示された<sup>4)</sup>。また、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会（2010）は、ろう学校等におけるデフリンピックの認知度100%を目指した啓発事業<sup>22)</sup>を展開するなど、その認知度を高めるために積極的に動き出した。しかしそれらの活動は聴覚障害者間に留まっており、健聴者に対するアプローチはなされていない。

アダプテッド・スポーツに関心のある体育専

攻学生は、健聴者のなかでも競技者として、あるいはスポーツ指導場面で聴覚障害者と関わる可能性が高いと考えられる。そこで、これらの学生が、デフリンピックを契機に聴覚障害者のスポーツに興味関心を抱くことができれば、スポーツにおける相互理解が進むことが期待できる。そのためには、スポーツを見ることから障害への関心、理解へ導かれる<sup>17)</sup>と高橋（2004）が述べているように、デフリンピックを見る必要がある。しかし、デフリンピックの競技映像は、国内では意図的に専用サイト<sup>21)</sup>にアクセスしなければ見るができない。

そこで、競技映像を見せるための方法とその内容についての検討が必要である。映像視聴を通して得られたコメントについて、障害のある人がスポーツをする場面を映像でみた障害のない学生のコメント<sup>2)</sup>やパラリンピックのビデオを視聴した人々が抱く「障害があるにもかかわらずがんばっている」<sup>3)</sup>との感想は、障害者スポーツを見慣れていない人たちが持つ正直な思いの一つだと藤田（2002）は指摘する。けれども、デフリンピックがパラリンピックやその他の障害者のスポーツと異なる点は、競技実施にあたってルールの変更や特別な用具を使用しないこと、障害特性にあわせて開発された競技種目がないことである。そのため、デフリンピックの競技映像ではルールや用具、競技方法において障害特性が可視化されにくい。視聴者は、障害者スポーツという視点で興味や関心を抱くのであろうか。そこで、映像を通して得られる競技の特徴や疑問について明らかにし、競技映像を見ることで、興味関心を高めることが出来るかについて検討する。その結果は、健聴者が聴覚障害者のスポーツを理解するための教育内容や方法を検討するための基礎資料になる。

以上のことから、本研究は、デフリンピックをアダプテッド・スポーツに関心のある体育専攻学生という競技者の視点から、映像を通して得られる競技の特徴や疑問について明らかにすることを目的とした。

## 2. 方 法

### 2.1 調査対象

関東地方にあるA大学で開講されているアダプテッド・スポーツに関する授業を受講して

いる体育専攻学生 89 名に対して調査を依頼した。そのうち本研究に同意し回答した 72 名(19 歳～22 歳、男子 44 名、女子 28 名)について分析を行うこととした。当該授業は、専門科目として設定されており、受講するすべての学生は、基礎科目もしくはその他の専門科目で、アダプテッド・スポーツ関連の授業を履修していた。

## 2.2 調査時期と方法

調査は、200X 年 10 月に、当該授業後半の約 35 分を使って実施した。対象学生は競技映像を約 25 分間視聴し、その後質問項目を記したコメントシートに回答した。実際の回答時間は 10 分以上、20 分未満であった。回答にあたっては、コメントシートの質問項目を読み上げ、記入方法についての確認をした。

## 2.3 調査項目

### 1) デフリンピックの認知度

「今日の映像を見る以前からデフリンピックについて知っていましたか?」という問いに対し、「よく知っている(見たことがある)」「少し知っている(名称程度)」「知らない」から選択回答してもらった。よく知っている、少し知っ

ている場合は、その内容について記述を求めた。

### 2) 競技映像から感じたこと(自由記述)

映像を通して得られる競技の特徴や疑問について検討するために、「競技映像を見て、気づいたこと、感じたこと、疑問に思うこと」について A4 サイズのコメントシート用紙に自由記述してもらった。

競技映像は、第 21 回夏季デフリンピックの競技会場観客席より撮影したものを約 25 分間に編集して用いた。提示の範囲は、個人競技(陸上競技、競泳)は、選手紹介から競技終了後の電光掲示板による競技記録一覧までとした。チーム競技(ハンドボール、バスケットボール、水球)は、それぞれ 1 ピリオド中の 5 分間とし、常時コート半面が映るように設定した。映像には競技会場内の音声、ベンチや審判の動きも記録されている。映像提示に用いた競技を表 1 に示した。

### 3) 興味関心

デフリンピックの競技映像視聴によって、デフリンピックに対する興味関心が喚起されるかを検討するために、「デフリンピックを見て、興味・関心は?」という問いに「とてもある(今後関わってみたい)」「ややある」「あまりない」

表 1 映像提示競技

競技	結果	新記録
陸上競技	優勝選手名(国名)記録	
男子 100m 決勝	GRĒNINŠ Māris (ラトビア) 10.64	
男子 1500m 決勝	MENJO Baxtone Cheruiyot(ケニア) 3:53.89	
男子 ハンマー投げ 決勝	森本 真敏(日本) 61.08m	DWR,GR
競泳	優勝選手名(国名)記録	
男子 100m 自由形 A決勝	GERMANO Luca (イタリア) 52.19	GR
女子 100m 自由形 A決勝	LYTVYNENKO Ganna (ウクライナ) 57.29	DWR,GR
男子 100m 平泳ぎ A決勝	PARKIN Terence(南アフリカ) 01:03.51	GR
ハンドボール		
男子 準決勝	トルコ 20 対 32 ドイツ	
水球		
男子 決勝	ハンガリー 17 対 11 イタリア	
バスケットボール		
女子 1-8位決定戦	ウクライナ 55 対 36 日本	

DWR:ろう者世界記録

GR:大会記録

「まったくない」から選択回答してもらった。

## 2.4 分析方法

コメントシートの分析では、記述された全回答について、キーワードをコード化して抽出した。まず、記述文章からキーワードとなりうる名詞及び名詞の文字列をリストアップした。次に、リストアップしたキーワードを内容的に類似するもので小グループ化した。そして、小グループ化したカテゴリー内容の類似するものをグループ化して、競技レベル、競技力、違和感、疑問点の内容に関する項目を作成した。カテゴリー化の作業では、その妥当性を高めるために複数（本研究と本研究に直接関係しない体育学を専門とする研究者）で協議しながら実施した。さらに作成した各項目について、該当する記述内容が含まれている回答を抽出し、記述内容を整理した。なお、同じ内容の記述が複数の意味を持つ場合は複数の領域に重複してカウントした。

## 3. 結果と考察

### 3.1 デフリンピックの認知度

デフリンピックの認知度については、よく知っている（見たことがある）2名（2.8%）、少し知っている（名称程度）10名（13.9%）、知らない60名（83.3%）であり、認知度は16.7%であった（表2）。これは、内閣府<sup>8)</sup>が示す日本国内における認知度（2.8%）よりも高いが、同調査のパラリンピック（94.1%）や齊藤<sup>15)</sup>の報告によるパラリンピックの認知度（96%）よりも明らかに低い結果であった。見たことがあると回答した2名はいずれもインターネットの動画による視聴であった。パラリンピックはオリンピックに続いて開催されるため、インターネットによる特設サイトもオリンピックから継続して提示される。また、開催期

間中にハイライト番組としてテレビの地上波でも放送されている。さらに、事前特番、総集編も放映されているため実際に何らかの映像で競技を見ることができる<sup>5)</sup>。一方、デフリンピックは、地上波テレビによる放送がほとんどない<sup>18-20)</sup>ため、関係者以外が競技を見るためには、意図的に専用サイト<sup>21)</sup>にアクセスしなければならない。意図的にアクセスするためには、デフリンピックという名称を知っていることが必要であり、現状の認知度では不十分である。少し知っている回答の内訳は、授業で聞いたことがある、パワーポイント、ポスターを見たであり、授業以外の理由でデフリンピックについて知っていたという回答はなかった。これらの結果から、アダプテッド・スポーツに関心のある体育専攻学生であっても、デフリンピックや聴覚障害者とスポーツに関する内容に言及する授業を履修しない限りデフリンピックのことを知る機会はほとんどない現状が示された。そこで、健聴者がデフリンピックや聴覚障害者のスポーツを見て、興味関心を持つきっかけを得るためには、意図的に教材として取りあげることが最低限必要であると考えられる。

### 3.2 映像から感じたこと

記述された全回答について、キーワードをコード化して抽出した。次にコード化されたキーワードをもとに競技レベル、競技力、違和感、疑問点の内容に関する項目を作成した。さらに作成した各項目について、該当する記述内容が含まれている回答を抽出し、記述内容を整理したものが表3である。

競技レベルに関する回答が72件、そのうち競技レベルは低いと約8割であり、いずれもタイムやフォームをもとにその理由について言及していた。競技力に関する回答は54件あり、そのうち体力に関するものが23件、技術に関するものが18件、戦術に関するものが13件であった。そのうち体力に関するものは、スピード感やコンタクトプレーでの力強さに課題を指摘する内容であった。技術に関しては、個々の競技者の基礎的な動きや状況判断について課題を指摘する内容であった。戦術に関しては、チーム戦術とそのコミュニケーションへの課題を指摘する内容であった。

表2 デフリンピックの認知度

デフリンピックの認知度	n (%)
よく知っている／見たことがある	2 (2.8)
少し知っている／名称程度	10 (13.9)
知らない	60 (83.3)

競技レベルや競技力に関する記述から、本研究に参加した体育専攻学生は、デフリンピックを自分たちが知っているスポーツと「同じスポーツ」として捉えていることが示された。デフリンピックは、オリンピックで実施されている競技規則を採用していること、競技中は、聴力レベル 55dB 以上という条件を保つため、また安全上の理由から競技規則により補聴器や人工内耳のヘッドセットを装着できないことになっている<sup>6)</sup>。そのため、外見からは障害が見えないことから、同じ競技という視点でのコメントがなされたと考えられる。その結果、スピード感のなさ、フォーム、記録、とくに個人競技ではタイムをもとに客観的比較をした結果、インターハイ入賞レベル、中学生の全国大会レベルなどが指摘されたと推察する。これは、デフリンピックを障害者スポーツという視点で見えていないことを意味しており、障害者スポーツのあり方として、藤田（2002）の指摘する、パラリンピックを障害に着目して見るのではなく、競技者としての側面を主張する<sup>3)</sup>ことが実現できるものになっている。

違和感については 96 件あり、そのうち静かさについての内容が 60 件と最も多く指摘された。競技場内での選手の声がないこと、観客の声援がないこと、笛の音だけが響くことに対して違和感を抱いていることが示された。また、視覚情報についても 32 件あり、競技者だけでなく競技役員もベンチもゼスチャーやサインを使うこと、選手が絶えず周囲を見ている、きょろきょろしていること、競技中の合図にライトなどが使われることが指摘された。判定基準については 4 件あり、反則に対する判定基準を問うものであった。

疑問点については、51 件あり、そのうち視覚情報が 20 件と最も多く指摘された。具体的には視覚情報機器の配置や分かりやすくする工夫について、反則が生じてでもプレーが止まっていない現状を指摘する内容であった。工夫については 17 件あり、デフリンピックの盛り上げ方や独自の応援方法の有無、デフリンピックの特徴についての内容であった。また、コミュニケーションとモチベーションについて、それぞれ 7 件あるが、いずれも聞こえない場合のコ

表 3 コメントシート記述の分類

項目	内容	キーワード			
10: 競技レベル(72)	11: 高い (13)	本格的(8)	インカレ(5)		
	12: 低い (59)	タイム(33)	フォーム(13)	インターハイ(11)	中学生の全国大会(2)
20: 競技力(54)	21: 体力 (23)	スピード感(9)	歩く(6)	コンタクトプレー(5)	力強さ(3)
	22: 技術 (18)	ターンオーバー(5)	判断(3)	ジャンププレー(3)	クロスプレー(2)
		動き(1)	習熟(1)	反応(1)	とまる(1)
	23: 戦術 (13)	アイコンタクト(3)	テンポのずれ(3)	展開(2)	ファウル(2)
30: 違和感(96)		連携(1)	マークのずれ(1)	アピール(1)	
	31: 静かさ(60)	プレーヤー(17)	相互確認(4)	フリーの選手(2)	キーパーの指示(1)
		笛の音(16)	声援(13)	応援(7)	
	32: 視覚情報(32)	審判・役員(4)	ゼスチャー(4)	サイン(3)	ランプ・ライト(12)
		コーチ(1)	指示(1)	手話通訳(1)	旗(1)
40: 疑問点(51)		選手(1)	きょろきょろ(1)	気づかない(1)	配置(1)
	33: 判定基準(4)	ファウル(2)	遅い(1)	緩い(1)	
	41: コミュニケーション(7)	確認(3)	連携(2)	ベンチ(2)	
	42: 視覚情報(20)	配置(8)	ストレス(6)	分かりやすくする工夫(6)	
43: モチベーション(7)		声援(4)	苦しさ(2)	支え(1)	
	44: 工夫(17)	盛り上げる(8)	応援方法(6)	特徴的な魅力(3)	

※ 項目、内容の前にある数字はコード、( ) の数字は件数を表す

コミュニケーション方法やモチベーションの保ち方について、聞こえる環境でプレーしている競技者の立場からの疑問であった。

聴覚障害者が行うスポーツでは、声によるコミュニケーションに代わって、視覚情報が重要である<sup>1,14)</sup>。競技者同士、監督やコーチと競技者、審判と競技者などのコミュニケーションは国際手話を中心に、発光ランプ、電子掲示などの視覚情報<sup>21)</sup>が使用されている。そのため、日常的に経験しているスポーツ活動場面とは異なる「静かさ」に強い違和感を感じたのであろう。観客の声援がないことについては、観客も聴覚障害者やその家族や関係者が多いことが推察される。一方で、地元の小学生を招待するというプロジェクトが実施された会場では、子どもたちが大声援を送って旗を振り、それに呼応するように聴覚障害者の拍手である、両手を頭の高さまで上げて手をひらひらと振る応援が見られたことから、競技場内が一体化する応援方法を工夫することは、見るスポーツとしての面白さを示すことができる。そこで、デフリンピック独自の応援方法、観戦方法などを戦略的にたてていけば、見ることを契機に、次の段階である知ること、つまり興味・関心を持って理解することにつながると思われる。

競技ルールや用具の変更がほとんどないというデフリンピックの特徴が、パラリンピックと比較して分かりづらい、興味を抱きにくいという課題も指摘された。この点に関しては、デフリンピックを障害者スポーツという視点で捉えていることが考えられる。映像視聴を通して得られたコメントについて、障害のある人がスポーツをする場면을映像でみた障害のない学生のコメント<sup>2)</sup>やパラリンピックのビデオを視聴した人々が抱く「障害があるにもかかわらずがんばっている」<sup>3)</sup>との感想は、障害者スポーツを見慣れていない人たちが持つ正直な思いの一つだと藤田(2002)は指摘する。しかしながら、本研究では、「聞こえないにもかかわらず」という視点のコメントは見られなかった。デフリンピックがパラリンピックやその他のスポーツと異なるのは、障害が可視化されにくいという点である。そのため、自分たちの知っている競技スポーツという視点で映像を見ると、競技力については個人競技の一部を除いては、客観

的評価は低くなる。そのため、ろう者の文化・コミュニティとして独自の価値を有するとされる、ろうスポーツの価値観<sup>6)</sup>を有していない健聴者にとって、デフリンピックの意義を理解することは非常に難しい。その難しさが、今日の認知度の低さ、そして国際大会運営の困難に直面しているのであろう。この点に関しては、ICSDのデフリンピック広報戦略<sup>7)</sup>に、聴覚障害者の視点だけでなく健聴者への理解を促すための視点を加味していけばよいと考える。

### 3.3 デフリンピックへの興味関心

映像視聴後のデフリンピックへの興味関心については、とてもある12名(16.7%)、少しある23名(31.9%)、あまりない28名(38.9%)、まったくない9名(12.5%)であり、約半数に興味関心が見られた(表4)。

この結果は、約25分間という短い時間ではあるが、デフリンピックの競技場面を視聴することで、デフリンピックに興味関心をもつ契機になる可能性があることを示している。一方で、まったく魅力を感じない、興味関心を持っていない場合もあることが示された。しかし、何もしなければ、デフリンピックの知名度は低いままであり、聴覚障害者のスポーツ活動の現状にも気づかない。デフリンピックを目指す競技者やデフスポーツ関係者は、健聴者の指導を積極的に求めており、健聴者を受け入れる環境ができつつある<sup>4,10)</sup>。そこで、デフスポーツへの興味関心を高める、アダプテッド・スポーツへの誘いという意味で、デフリンピックの映像や聴覚障害者のスポーツを題材とする教育内容は、体育を専攻する学生にとって必要である。

以上のことから、デフリンピック映像を見ることは、聴覚障害者のスポーツに対する興味関心を抱く契機となる可能性がある。一方で、ろう者の文化としてのデフリンピックという視点

表4 デフリンピックへの興味関心

デフリンピックへの興味関心	n (%)
とてもある	12 (16.7)
少しある	23 (31.9)
あまりない	28 (38.9)
まったくない	9 (12.5)

もあわせて提示していくことも必要であろう。そうすることで、デフリンピックを見ることを契機に、次の段階である知ること、つまり興味・関心を持って理解することにつながると考えられる。

#### 4. まとめ

デフリンピックをアダプテッド・スポーツに関心がある体育専攻学生という競技者の視点から、映像を通して得られる競技の特徴や疑問について明らかにすることを目的とした。その結果、デフリンピックは、障害者スポーツとしてではなく、スポーツという視点で捉えることができること、競技力については総体的に低いと感知ること、静かさという特徴とそれに関連する視覚情報、デフリンピック独自の応援方法などに興味や疑問を持つことが示された。

#### 5. 文 献

- 1) Australian Sports Commission (1997): Coaching deaf athletes. Australian Sports Commission.
- 2) 藤田紀昭 (2008): 障害者スポーツの世界. 角川学芸出版.
- 3) 藤田紀昭 (2002): 障害者スポーツとメディア. (編) 橋本純一, 「現代メディアスポーツ論」, 世界思想社.
- 4) 五町歩美 (2010): 聴覚障害者の生涯スポーツにおける「デフスポーツ」の役割. 筑波大学大学院体育系修士研究論文集, 32: 45-48.
- 5) 井上美紀 (2008): パラリンピックの報道に関する一考察. 平成 19 年度筑波大学卒業論文, 特殊体育学研究室.
- 6) International Committee of Sports for the Deaf (2011): About, <http://www.deaflympics.com/about/>.
- 7) International Committee of Sports for the Deaf (2011): ICSD eNews, August, 2011
- 8) 内閣府 (2006): 障害者の社会参加促進等に関する国際比較調査. 内閣府.
- 9) 内閣府 (2010): 障害者白書, 平成 22 年度版. 内閣府.
- 10) 中村有紀 (2009): デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書. 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター報告書.
- 11) National Association of the Deaf (1981): Deaf Heritage. -A Narrative History of Deaf America-. National Association of the Deaf.
- 12) 及川 力 (1995): 知られざる聴覚障害者スポーツ. Proceedings of the 2nd Tsukuba International Workshop on Sport Education, pp. 23-28.
- 13) 及川 力 (1998): 国際ろう者スポーツ委員会が国際パラリンピック委員会を離脱した要因について. スポーツ教育学研究, 18 (1): 49-54.
- 14) 齊藤まゆみ (2004): 聴覚障害者とアダプテッド・スポーツ. (編) 矢部京之助「アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のための理論～」市村出版.
- 15) 齊藤まゆみ (2010): 体育専攻学生の視点からみたデフリンピック. 日本体育学会大会予稿集 61: 296.
- 16) 砂田武志 (2000): ろう者とスポーツ. 現代思想編集部, 青土社.
- 17) 高橋 明 (2004): 障害者とスポーツ. 岩波新書.
- 18) 財団法人日本障害者スポーツ協会, 財団法人全日本ろうあ連盟 (2010): 第 21 回夏季デフリンピック報告書.
- 19) 財団法人日本障害者スポーツ協会, 財団法人全日本ろうあ連盟 (2007): 第 16 回冬季デフリンピック報告書～ソルトレーク 2007～.
- 20) 財団法人全日本ろうあ連盟, 日本ろう者スポーツ協会 (2005): 2005 メルボルンデフリンピック大会報告書.
- 21) 財団法人全日本ろうあ連盟 (2009): 第 21 回夏季デフリンピック台北 2009 日本選手団 ウェブ サイト, <http://www.jfd.or.jp/sports/21sd/>.
- 22) 財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 (2011): デフリンピック啓発ウェブサイト, <http://www.jfd.or.jp/deaflympics/index.php>.